

埼玉医科大学大学病院・総合医療センター・国際医療センターの設立の経緯について

埼玉医科大学病院は3病院(急性期病床、計約2,500床)の体制で運営されており、本院、総合医療センター、国際医療センターはそれぞれの経緯で設立され、順次医療提供体制は変更されてきました。そこで、3病院の設立の経緯を簡単に述べ、その特徴を説明したいと思います。

<大学病院本院: 特定機能病院>

明治25年に埼玉医科大学病院の設立母体である毛呂病院が設立された。

昭和22年、毛呂病院は社会福祉法人の総合病院となりました。

昭和47年、埼玉医科大学が開学し、付属の大学病院として開院した。

平成19年、国際医療センター開設前には、1400床の病床を有していたが、分離後800床の特定機能病院として、教育・研究の主役を担い、診療面では国際医療センターと機能分化して現在に至っている。

<総合医療センター: DPC II群病院>

昭和50年代に川越市長から要請があり、昭和60年に川越市鴨田の地に埼玉医大総合医療センターを開院した。その後の医療体制の変遷についてはヒアリング調査票に記載した。

<国際医療センター: DPC III群病院>

平成10年代、埼玉県の地域保健医療計画に基づき、3大成人病と救急に特化した病院の建設を依頼され、平成19年に開設した。現在包括的がんセンター385床、心臓病センター167床、救急救命センター144床など700床で稼働している。病院の機能としてはがん診療拠点病院、救急・救命センターでドクターヘリ運航、さらに災害拠点病院でありDMAT指定病院である。

<3病院体制の特徴>

埼玉医科大学3病院は連携を保ちつつも、それぞれの個性をもって機能を分化し、先進的医療から、地域医療までを徹底的にやるというスタンスで発展してきた。とくに埼玉県のこの地域には病院・医師が少ないため、「医療の最後の砦」となっている。

学生教育に関しては大学病院の果たす役割が大きい。研修医については3病院自由選択プログラムにより、それぞれの病院のなかからベストの研修が受けられる体制である。後期研修医はキャリアアップをみて3病院のいずれかで専門医研修を受けている。

<大学病院と国際医療センターとの連携>

国際医療センターとは約2kmの距離にあり、必要時にはお互いに補完し合って診療にあっている。多くの医師に兼任辞令を発令して先進医療から地域医療まで対応できる体制を取っている。循環器など大学病院で必要な診療部門は、総合診療内科の中に心臓内科医を加えているし、今後は総合外科も計画中であり、必要な部門の充実を図っている。当院は、大学病院と国際医療センターの2つの病院で、1つと思っている。

埼玉医科大学病院

(特定機能病院)

診療実績 病床数 816床(実働) (22病棟)
平均入院患者数 760名(平成26年度)
平均外来患者数 1,633名(26年度)
年間救急車受け入れ台数 4037件(25年度)
月間手術件数 700件(26年度)
平均在院日数 14.2日(26年度)
特定集中治療室(ICU) 10床,
ハイケアユニット(HCU) 21床

医師数 338名 研修医 49名 職員総数 1702名

現在の特徴 ・地域周産期母子医療センター 母体・胎児集中治療室(MFICU) 6床

新生児特定集中治療室(NICU) 18床 新生児治療回復室(GCU) 18床

- ・小児救急医療拠点病院
- ・感染症診療 感染症病床 14床 (I 類2床、II 類6床) 結核モデル病床 6床
- ・がん診療 地域がん登録 807名(平成25年度) 670名(平成26年10月まで)
リニアック放射性治療装置更新中

・肝疾患連携拠点病院

・精神科診療 精神科救急身体合併症事業 50例(平成25年度)

今後の計画 ・東館での診療 内視鏡センター、難病センター、救急救命の機能向上とDMAT創設
・総合診療内科の充実: 心臓内科、 総合外科の計画

